

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】  
【リンクはご自由にお貼りください】  
「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)第1回期日(20230623)提出の書面です。

令和5年(ネ)第292号 国家賠償請求控訴事件

控訴人 大江千束 ほか

被控訴人 国

## 控訴人小野意見陳述要旨

2023(令和5)年6月23日

東京高等裁判所第2民事部 御中

|              |         |
|--------------|---------|
| 控訴人ら訴訟代理人弁護士 | 上 杉 崇 子 |
| 同            | 寺 原 真希子 |

記

控訴人小野の意見陳述の要旨は、別添した書面に記載のとおりです。

以上

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)第1回期日(20230623)提出の書面です。

控訴人の小野春と申します。今日はこのような機会をくださってありがとうございます。わたしと、パートナーで控訴人の西川麻実はそれぞれ過去に結婚をしております。そこで授かった子どもが私に2人、パートナーに1人いますが、3人の子どもたちを共に我が子として育ててきました。子どもたちが小学校に入る頃に一緒に暮らし始め、現在子どもたちは全員成人しています。

私と元夫は、私のセクシャリティとは関係のないことで離婚しましたが、その後西川と出会い、ようやく自分が異性愛者ではなかったのだと知りました。保守的なキリスト教徒の両親のもとで育った私には、異性愛以外が存在することはまったく想定していないことでした。そうして30歳を過ぎてから西川と付き合いはじめ、それまで欠けていたなにかがようやく埋まった気がしました。

小さかった子どもたちはほんとうに可愛くて、3人の子どものいる生活は目が回るほど忙しくて、とても幸せでした。ともに泣いたり笑ったり、ときには喧嘩をしたりしながら、共働き家庭として、地域のなかで暮らしてきました。休日には子どものサッカークラブに付き添い、子どもの誕生日にはディズニーランドに行きました。西川と子ども達と家族として暮らすことは、元夫と暮らしていた時と家族の中身はなにも変わりませんでした。

しかし、子どもたちが小さかった頃は、まだLGBTQという言葉もなく、学校でも先生たちが私たち家族を受け入れてくれるのか分からなかったのも、カミングアウトできないままでした。法律上も家族ではなく、社会の隅に「置いてもらっている」ような気がして、いつも自信がなかったです。本当は私も、周囲の家族と同じように、当たり前ふうとして、のびのびと子育てがしたかったです。

育児をしていた間は、常に気を張り、工夫を凝らしていましたが、それでもどうしていいのかわからない壁にぶつかることがしばしばありました。一番最初に途方に暮れたのは、家族5人で暮らし始めた頃に、次男が入院したときの出来事です。風邪をこじらせ入院していた次男が、退院直前に別の病気が見つかり、検査のため再入院といわれて、つきそっていた西川が次男の入院手続きをしようとしたところ、

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)第1回期日(20230623)提出の書面です。

同性のパートナーでは手続きができません、離婚している元夫でもいいので血縁の親を連れてきてください、と言われました。同性のパートナーだと入院手続きができないこともショックでしたが、それよりも困ったのは、病院の人を安心させられる証明がなにもないことでした。実態は親子として暮らしているのに戸籍上は他人、なんの公的な証明もないということは、いざというときに家族が守れなくなる、ということでした。

6年前には今度は私に乳がんが見つかりました。がんは思いのほか進行しており、自分が亡くなったら子どもたちはどうなるのだろう、法律上他人になる西川に子どもたちを託していけるのかと考えると歩いていても涙が止まらなかったです。病院では度々家族であるかと聞かれました。がんの告知を聞くのも「家族」だけ、入院書類は、手術の同意書は、と、次から次へと「家族」と言われるたびに、気持ちが折れそうになりました。どうして私だけ、周りの人と同じように病気のことだけを心配することもできないのでしょうか。

子どもたちは、幼少期からおとなになるまで、この家庭で育ちました。子どもたちは、「自分たちにとってはこれが家族」だと言います。「周りの人がとやかく言わなければふつうに暮らせるのに」とも言います。子どもたちがおとなになった今でも、家族の誕生日には、家を出ている子どもも戻ってきて、ケーキを囲んでみんなでお祝いをします。

そんなふつうの家族ですが、子ども達も、自分達の家族のことを外で受け入れてもらえなかった体験を何度もしてきました。小学校の頃、長男が書いた作文に出てきたパートナーのことを、悪気なく先生が書いた「この人は誰ですか」という一言から、長男は家族のことを長いこと外で話さなくなりました。夏休みの課題で長男が描いた家族の絵は、血縁のない西川と娘を、薄ぼんやりと描いたものでした(甲D8)。娘は、長男のことを「兄ちゃん」と呼んでいましたが、クラスメイトから「お前の兄ちゃんじゃないだろ」と言われて、それから長らく、長男のことを兄とは呼びませんでした。学校にカミングアウトをしたのは、子どもたちが中学生になって

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)第1回期日(20230623)提出の書面です。

からですが、高校生になった娘が、雑談のなかで先生に家庭状況を伝えたところ、「可哀想に、複雑な家庭で育ったのだな」と憐れまれてしまい、「私は全然不幸じゃないのに」と困惑して帰ってきたこともありました。

法律があつたら、結婚ができていたら、子どもたちもこんな思いをしなくて済んだかもしれない、と思います。周りの子どもたちのように、屈託なく家族の話ができたかもしれない。家族なのに家族ではないと、外から言われるかもしれないと心配せずにいられたのではないかと考えてしまいます。

私の親はすでに80を超えています。私が西川と暮らし始めた頃には驚き戸惑い、まったく受け入れられないと嘆きましたが、私たち家族の暮らす様子を見ているうちに「あなたたちは家族なのね」と受け止めてくれるようになりました。今では5人で家族行事にも参加し、堅物であった父も、「おれはLGBTを応援している、周りにもそう言っているんだ」と言ってくれるようになっています。

会社や近所にもカミングアウトして暮らしているので、周囲も私たちを家族として接してくれています。それでも手続きなどの際に「あなたの家は結婚してないんだっけ」と、かえって混乱させてしまい、申し訳なく思います。また、結婚している友人たちからは度々、「結婚していてごめんね」と謝られたりします。そんなふうに言わせてしまうことも心苦しいです。

今年2月には「同性婚を認めたら、社会が変わってしまう」という岸田総理の言葉もありました。隣に住んでいたら嫌だ、という荒井秘書官の発言もありました。が、社会はもうとっくに変わっています。私たちのような家族はすでにもうたくさんこの日本で、ご近所さんと仲良くしながら暮らしています。法律だけが実情にあっていないので、当事者だけでなく周囲も困らせている、なによりも子どもたちを困らせているこの現状を、変えてください。幸せなひとが増えるだけで、この制度を使わない人たちにはなんの迷惑もかかりません。

私は12年間、子育てをしているLGBTQ家族の会「にじいろかぞく」に関わってきました。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第一次訴訟控訴審(東京高裁)第1回期日(20230623)提出の書面です。

総理と秘書官の差別発言を聞いたにじいろかぞくの子どもたちは、「総理は僕たちみたいな家族がいることを知らないんだよ」「だからしらせてあげよう」と言いました。そうして、集まったハガキは500枚を越えました。ごく一部ですが意見陳述書に添付しました。

中には学校で友だちから「お母さんたち結婚できてないじゃん」と言われて泣きそうになったという小学校3年生のハガキもありました。

私たちにも、結婚制度を使わせてください。他の制度はいりません。子どもたちに、周りの家族とは違う、とは思ってほしくないからです。

地裁では、私たちになんの保障もない状態が違憲という判断をいただきました。高裁ではさらにすすんで私たちが結婚制度から排除されていることが違憲、ということ勝ち取りたい。その思いでここに立っています。

20年間、家族でこんな思いをしてきたのは、もう終わりにしたい。私たちは家族として暮らしてきました。だから法律上も家族になりたいです。

以上